

Jude the Obscure 考

——作品の位置も含めて——

宮 田 實

Jude Fawley < Sue Bridehead
Arbella Donn
Richard Phillotson

はじめに

Thomas Hardy (1840~1920) は長編小説14編、中・短篇小説8編、詩は詩集として9編、劇は3編とかなり精力的に書き続けた作家である。これらの作品は特に小説に於て筋運びがドラマチックに構成されていて未だ映画のなかった時代に、現在でもテレビ化・映画化するに相応しい程、その先駆的役割を果した映画的手法の実践者として記憶されるが、これらの作品に対する評価・批評は実に区々である。例えば、『地上にうごめく人間はみんな「ひとつの意志に教導される、地球上の機械人形」(Jackalock to be fugled by one Will) で、ナポレオンでさえ人形師にあやつられてぎくしゃく踊る傀儡にすぎず、ましてその末輩は「生まぬるいどぶの中でぼうぶらのようにふらふら回転しているにすぎないと言う。」^①と言った見方から「すべて人間は盲目な宇宙の意志・宿命の手に操られる傀儡であり、傀儡のくせに自分の運命を握る大きな力のあることに気付かず、なんとか自分の運命を切開こうと小ざかしい猿智慧を働かせて自ら悲劇を招いてばかりいるのが人間だと作者は説くのだ」^②との見方や「Hardy の文学は一口に言って、^③生は提供しておきながら否定する、という人生の宿命的不条理と対決する悲劇の文学である。彼の眼に映った人間とは、この命題を背負わされた哀れな存在であり、人生とはこの人間達の一心な営みや真摯な願望が、何ものかによって次々と破壊されて行く過程であった」などで、たしか

にその考え方に東洋的宿命観に通ずるものとか、「運命の皮肉」といったものが主流に存在するといった見方・評価が従来の Hardy 文学評価にかなり大きな weight を占めていたと思うし、そういったものなしに説明・批評が出来ない作品も幾つかあることは間違いないが、全体としてみればあくまで自然主義文学の真骨頂をバックボーンとして具備していることを見逃してはならないと思う。そういった意味から Hardy の作品を自然主義文学のそれとして評価し、その自然主義文学の要素の色濃く表出された作品の中から、すぐれた文学的価値を改めて見直そうと努めるものである。今すぐ脳裏に浮ぶものだけでも Jude のほかに“A Tragedy of Two Ambitions”の Joshua や Cornelius, “The Son’s Veto”の“Randolph, The Return of the Native”の Clym Yeobright 等善良で真面目な気の小さくて頭のよいこれ等青春群像を通してイギリスの当時の社会状況の一端を厳しく暴露した問題小説と断定出来るものが見当るのである。

そこでこの小論文では特に“Jude the Obscure”に絞ってその問題提起個所を掘り下げてみたいと思う。

1

この作品の読後感はずっと重く息がつかまる程である。一体何故なのだろうか。長編だからこそあれ程に精緻に性格描写も出来たのだろうけれど、幼年時代の Jude はじめじめした土の上に半分体を出した蚯蚓(みみず)の群を爪先でその蚯蚓(みみず)のいない処

を拾いながら、一匹も殺さないように気を付ける、何物をも害うにたえない少年だったのだ。離鳥の巢を家へ持って帰れば、心の悩みに、夜中に決って目を覚まし、樹を切り倒したり、枝を払うのを見るに忍びなかった程の薄弱な性格の持主だったのである。そして又えさを求めて群がるカラスさえもその追払いに備わっているながら追払えないやさしさを持った気の小さな善良な少年だったのだが、長じてもその性格は変わらず、学問の情熱を人一倍持って刻苦精励の独学を続けるが、いつ果てるともない貧困の泥沼の中で意志薄弱と女と strong liquor の誘惑にもろくも人生の敗北者となり極めて悲惨に死んでゆくその姿にとりわけ悲哀を感じ悲涙を禁じ得ないのである。

Jude は文字通りまさに生れながらの貧困を背負って登場する。惨めな逆境に育つことのほか Christminster の学府に憧れそこと大学の建物はまるで幼年時代からいじらしい程の憧憬と幻でさえあった。栄達の野心を深く秘めて、学問を通じて貧困階級から知識階級へ這い上ろうと或時は学者を志し、或時は牧師補を志して涙ぐましい努力を続けたが目指す知識階級一学者も牧師補も所詮手の届かぬ一種の幻に過ぎなかった。そのみではなかった。無情な仕打は情容赦なく彼の身に襲いかかったのだった。彼は一度結婚したことのある従妹の Sue に一目逢いたいと不治の病を冒して雨の中を強行軍しそれがもとで帰ると間もなくヨブの絶望の言葉を口誦みながら、一層冷酷になった先妻の Arabella がわざと出掛けてしまったその後に祭礼とボートレースの騒ぎを窓越しにききながら末期の水も貰えないで最後の息を引き取る。

私的利益のみの追求、個人の消費生活のみ生きがいをかける歪んだ人間の生の営み、差別と特権が無反省に横行して、無目的な行動に狩り立てる非人間性を絶えず培養しつつある今日の状況の中で、どんなに立身出世・栄達を夢みて努力し誠実に生きようとも所詮は膨大な mechanism の中に閉じこめられ

鉄の扉に塞がれては、人間は機械化され非人間的に規制・抑圧されその精神、肉体がむしばまれ、その労働と生活が耐え難いものとされて、どうしようもない個人の無力をそれに基因する絶望・孤独・退廃・自棄のあげくの果ては社会機構の重圧のもと、虫けら同然に踏み潰されてしまう現実の社会的状況をつぶさに見つめさせずにはおれない姿で描き出された処にこの作品の持つ厳しい重さがあり重苦しきを感じさせるのではないだろうか。同時に作者は他の登場人物も含めて、無名な、下積みの生活にあえぎながら生きる人びとの複雑に入り組んで屈折する心理のあやと行動とを微細にとらえることのうちに人間への探索の糸口を求めているともいえる。

Hardy の作品はその殆どがその中で起る諸種の事件の社会的本質を掘り下げるといよりは自分の個人的な好悪や道義的感覚に訴えてくるものを、その限りに於て写實的に形象化するといったもので“Jude the Obscure”もその点で例外では決してない。しかしながらその問題提起を勇敢に取り上げて読者にいやという程考えさせる力量と素質を十分に兼ね備えていることに異論はないようだ。これこそ自然主義文学の面目躍如たるもので iconoclast としての Hardy の独断場でもある。

しかも権力をもつ当事者からの妨害、いやがらせは相当なもので如何に iconoclast として徹底していたかを改めて認識させられるのである。とりわけ僧侶からの抵抗の受け方は激烈で、彼等の神聖視する聖句が到る処に濫用されて侮辱されたことに激昂した yorkshire 州のウェイクフィールドの僧正は“Jude the Obscure”をかき集めて焚書事件を惹き起す程であったこと、又 Hardy はこの作品を最後に以後小説を書くのを断念して詩作に専念して晩年を送ったという事実にも明瞭なようにひどく一部世論、権力をもつ当事者の反撃を買った。これこそ真実を訴え、いうべきことを勇敢に大胆にいつのけたことの証左でもあろう。その点で Hardy の小説にかけ

る情熱と創作態度・創作の姿勢の正しさを知ることが出来よう。その観点から、as it is に当時の英国の時代風潮を symbolic に描いた点と Jude の憧憬 Christminster 大学に正規のコースを経ないで入学しようとして断られた経緯を中心に問題点を浮彫りにして論を進める積りである。

2

He was Age masquerading as Juvenility, and doing it so badly that his real self showed through crevices. A ground swell from ancient years of night seemed now and then to lift the child in his morning-life, when his facet took a back view over some great Atlantic of time, and appeared not to care about what it saw.

「彼は少年の仮装をした年寄りだった。やり方がうまくないので、真の自我が隙間からのぞいていた。いつも変らぬ夜の古い才月のうねりが人生の朝であるこの子供を時おりゆり動かすように思われた。その時の彼の顔は時の大海原をはるか振り返って、眼に映るものはすべて無頓着であるように思われた。」

発潮として底抜けに明るい立昇る朝の太陽、もぎ立ての新鮮な果物を思わせる、胸を張って歩く少年の代りに死の影がつき纏って生の希求と活力を一切なくした無気力、無重力の世界に住むとしか思われぬ地獄絵にでも出てきそうな化物の若年寄が浮遊する。この少年 Jude の登場はいささか shocking でさえある。

Children begin with detail, and learn up to the general; they begin with the contingent, and gradually comprehend the universal. The boy seemed to have begun with the generals of life, and never to have concerned himself with the particulars. To him the houses, the willows, the obscure fields beyond, were apparently regarded not as brick residences, pollards, meadows, but as

human dwellings in the abstract, vegetation, and the wide, dark world.

「子供は細部から始まって全体を学び手近なことから徐々に一般を理解するものなのだ。この少年は人生の一般から始めて特殊なことには無関心であるように思われた。彼にとっては、家並も柳の木もはるか向うの定かでない畑も煉瓦建ての住宅や樹木や牧場とは映らないで、抽象的な人家・植物それから広い暗い世界としか映らないようであった。」

すべてが混乱して倒錯している。知恵も道徳も狂って、退廃・荒廃・虚無だけが横行闊歩する悪夢の中の少年がクローズアップされる。教会では何と名をつけて貰ったかと Jude 夫妻に尋ねられると、「僕名がありません」「どうしたの」「たとえば、僕が死んで地獄へ落ちてでもキリスト教の葬儀料が助かるからです」と答える少年 Jude は明白に子供というものの実体から遊離して既に symbolic の世界に踏みこんでしまっている。この symbolic な描き方は従来殆どといってよい程人物はその作品中で reality を持たないものだが、その例にもれず、少年 Jude には reality は見出されない。ドストエフスキーの「罪と罰」のソーニアは作者の悲願で聖母マリアの如き永遠の夢としての女性を描く手段としての symbolic な表現であろうし、近くは三島由紀夫氏の「午後の曳航」の登という少年とその集団のませこけた異常な言動は少年 Jude に似てはいないだろうか。この非行少年はスリルと賦博的なスポーツを求め、無目的な行動に走り消費生活への墮落を基盤にして生ずる性と殺人、理由のない敵視とスリル等無意味・無目的な衝動と破壊の快感にわけもなく侵る非人間的な生き方に明け暮れる現実生活を描こうとしたのだろうが、symbolic で shocking な人物の登場である。少年 Jude の場合はどうか。やはり20世紀の足音が声高らかに響いてきた19世紀もおしつまって、嘗てない科学の拡充と政治的経済的混乱に基因する失業者の増大、労使の対立の激化、荒廃と虚無の顕著となった社会を通じ

て、当代の英国民の生活の厳しい現実をくっきりと描き出し時代風潮を as it is に捕え再生したものとみてよいであろう。この少年の言動はショーペンハウエルやハルトマンの厭世哲学の影響だと解く研究者もあり、少年 Jude が Sue の二人の子を殺害し自分も亦自殺を遂げる残虐な映像は未来の世代の予言であると Von Hartmann は嘗て評したが、作家の観念であって諸矛盾・精神的倒錯の現実生活を厳しく見つめ必然的な形で捕えこれを醸成させ、再生したのであった。

「大学の学位は人を教えようとする者に必要な刻印で行く行くは大学を卒業して教会の方へ任命を受けようと思う」といって、小学校の先生が村を去る処で幕の開くこの小説のワキ役、Phillotson は主人公 Jude の Christminster 大学憧憬の先導者の役割を果たした格好だ。Phillotson も亦学府 Christminster に憧れ、栄達を夢みて学位をとろうと努力しそれに青春をかける。その性格はといえば善良さと純粹さ、人の好きを示す典型で金銭的には比較的無欲、インテリ特有の穏健な性格はほのぼのと読む人の心を和らげ暖めてくれて、微笑ましい庶民を感得させる。Jude が成人して憧れの Christminster 行をなすとげ、従妹の Sue と同伴で初めて Phillotson を訪ねた時あれ程 Jude を可愛がり互に離別を惜んだのに、「そんな生徒は覚えていません」といい切ったのは記憶力のよくないためか不注意のためか或いは虚栄のため自分の都合のためにそれとも Sue の手前故意に工作したのか判然としないが、いづれにしても謹厳なおっとりしたタイプで典型的な清教徒といった感じの男である。激しい情熱も冷血なエゴイズムも持ち合さない、感情の沈潜のみを示した理性的な好人物と映る、芒洋として一見影の薄い消極的なタイプである。神前で正式に結婚した妻を Jude に寝取られながらさして激昂もしないで自暴自棄に陥ることもなく「私は唯だ一つの条件を提出します。Sue に優しく親切にして下さい。繰り返して申しますが Sue を大事にして下さい。」

と怨恨の対象となるべき人に手紙を認めて傍目には実に歯がゆい程に、“The Return of the Native” の Deggory Venn が怨みごともいわず Thomasin に終始変らぬ自己犠牲的な献身的愛情を傾け注いだのと似て自己犠牲的、高潔な愛情を注ぐ。20才程も年令の違う Sue との愛情も影響しようが、それにしても寛大で無限の抱擁力を感じさせる愛情を表白する。これを聞くと Sue は「いい人ですねえ」と涙を包みながらいうのである。「彼は諦めたのです。殆ど諦め過ぎた位ですね」ともいう。あまつさえ Phillotson はこの妻に旅に出ても困らないように色々と気を付けてやったり、お金を遣ろうとまでいうのである。彼が Jude の許に走った妻の Sue を解放した事件について友人 Gillingham はいった。

“I was always against your opening the cage door and letting the bird go in such an obviously suicidal way. You might have been a school inspector by this time, or a reverend, if you hadn't been soon so weak about her.”

「君がああいう風に籠の蓋を開いて鳥を出してやるのは明らかに自滅的だからといって僕は何時も反対したものだ。君が彼女に対してあんな弱い態度をとらなかつたら、今頃は視学官か牧師になっていたかも知れないよ。」

善良でお人好しで消極的・自己犠牲的な Phillotson は視学官・牧師になるどころか彼は妻の Sue の離婚要求を赦したために上司から不当な迫害を受け校長の職務を追放されて散々な目にあつたのである。そのもつ善良さ、ヒューマンな、穏かな性格の故に彼は自滅したのである。膨大な社会機構の mechanism の凄まじい廻転の自転の圏外に情容赦もなく弾きとばされたのである。しがみついて雑草のようにただ will to live だけをもって野生的に生き残ることのむずかしさその矛盾をひ弱いインテリ男性の像を通して訴えて止まない Hardy の心情なのである。彼の持つその性格故にふりかかった苦悩と彼

を真に理解することの出来なかった Sue との対立が生み出す緊張とをいとおしむように深く、哀しいような共感のうちに抱きこんでいる作者なのである。

この問題の Sue と対照的な即ちセクシーでドライな物欲の Arabella の二人の女性に纏まって結婚制度の悪法——婚姻事件法——に押しひしがれて一生を棒に振ることになる主人公 Jude にとって女性問題はやはり致命的な要因であった。青年は肉感的な女性又は知的靈的な女性にそれぞれ憧れるものだといわれる。そういえば Lawrence の “Sons and lovers” では主人公 Paul は肉感的な女性 Clara とあわい月光のような、知的靈的な女性 Miriam とに憧れ、同時に恋して動揺し二律背反に苦しみこの二人が母親と共に Paul の生きる条件となり彼女達を極度に大事にした。「カラマーゾフの兄弟」では主人公イワンがドミトリーとキリスト教の代弁者のようなアリョーシャに同時にひかれたが、肉欲的獸的な Arabella と対照的な知的で植物性の女性 Sue とに次々と恋慕する青年の心理はいづれも共通のようだ。最初に出合う女性 Arabella はショーペンハウエルの “will to live” の道具と評される通り踏みしだかれても直ぐに立直る雑草のような生活力旺盛な女性として登場する。肉づきがよくてセクシーでまことにドライな人物。次に憧れた女性 Sue は Jude の一生を完全に左右するわけだがこれこそ Arabella とは対照的で感受性強く繊細な神経の持主で Jude よりも遙かに読書の量も多くすべてに批判的な近代的女性。靈的な植物性を帯びた理知的女性で Swinburn を愛誦し、Platonic な恋愛に生きる。年令的な隔りもあるが Phillotson の許を去る Sue は人じらしな気紛れな女と見做されよう。一見理知的で本人も理知的に考えようと努力するのだが、激情的になって衝動性の虜になる。例えば無精に男に愛されたくてひたむきに男に近づいてゆく孤独な虚栄心の強い女性なのだが、同棲中の恋人 Jude には sex を嫌悪する態度を屢々示して彼をい

らいらさせ苦しめる。そこへ突然夫 Jude の先妻 Arabella が出現すると、嫉妬の情にかられて Jude との正式結婚を即座に承諾してしまう。そのみか、彼女は徹底的に因襲否定もし、結婚制度の批判も苛烈を極めるが、夫 Jude の失業がもとで生じた貧困の故に一貫して理性的に終始することは出来ないで二人の愛児を少年 Jude に絞殺された途端に激情的・発作的に豹変して突飛な衝動性の虜になって、先夫 Phillotson の許に帰ってしまう。盲目的な無批判ぶり・感情のとりこになってしまう。所詮は自己中心的な観念と自己満足な従順に反抗を示しながらも観念と行動は一致を見ない矛盾を露呈した女性のタイプとして描かれる。Sue はしばらくの間幸福な生活を夫 Jude と送るが、結婚制度の因襲——婚姻事件法——から世人の迫害が頓に激しくなり Jude はそれがもとで生活の根を絶つ失業の苦痛を嘗めるにいたり、それが災いして先妻 Arabella との間の子の少年 Jude が Sue の子二人を絞殺してしまうが、この事件を目撃してその結果最大の被害者・犠牲者となつては嘗ての教養ある因襲否定の知的な女性 Sue もその事件が Arabella の崇りと神前で誓った結婚に背く神の崇りであると盲信しては、どんな諫めも抑制も聞き入れなくなって理性を喪失して盲目と化してしまう。Hardy はここで当時の社会としては知性の新しい萌芽を覗かせた漸新な一つの観念であった女性を新しく登場させると共に、この女性を通して因襲道德に対する積極的な反抗と批判を試みたと見てよい。

以上述べてきた Jude, Phillotson その友人 Gillingham, Sue, Arabella, 浮気で破廉恥な快樂主義者 Vilver 医師, 細かい神経のよく行届いた世話好きな Sue の叔母 Edlin, いずれも善良な、行動半径の小さい消極的な無産階級の人達ばかりだ。古来有名な小説には必ず読者の憎しみをかう悪人が登場するのが常だが、この小説には悪人が一人も登場しない。そういえば Hardy の作品には悪人らしい悪人が登場しないのではないか。その描

く処下層階級の人々——時に中産階級の人達——に限定されて人物はいづれも親しみのある善良で無名な下積みの生活に明け暮れる人達ばかりといえる。(貴族を主人公に扱ったのは、珍らしくも“The hand of Ethelberta,” “A Laodicean”の中の貴族と短篇“‘What the shepherd Saw’”の中の公爵だけであってこの三つの場合は貴族を諷刺の対象として皮肉に描き、“What the shepherd Saw”では、公爵は土地の人びとにとって神々の王ジュピターそのもの、その怒りを買うことは飢えと家の喪失と死を意味し、顔を仰ぐだけでも人びとは気おくれしすくんでしまおうと云う暴君、圧政者であり、嫌われ者として登場する。)そして何か一つの事件に躓いて次々と破局に追い込まれて脆くも敗北者となるか、鳴かず飛ばずに極く平凡に一生を終る虚げられた人達の運命とその過程を描くようだ。Judeの場合はどうも Hardy 自身の閥歴にぎざまれたことがらの投影だといえそうだが、そのほかの多くの主人公の人生のこのようなあり方はむしろ Hardy の願望なのであろうが……社会制度の欠陥・不備・不道德・不正義に向けた批判の眼をもつ目覚めた人もその眼を持たない意識の遅れた目覚めない人も共に同じ勤労者・虚げられた階層の人々の苦しみとして捉え、社会制度・そのしくみの悪に対する鋭い批判をぶっつけ、貧乏に対する怒りを消極的・婉曲に訴えて止まない。

3

この破天荒に知的な面を備えた一女性 Sue は多年の螢雪の功も空しく Christminster 大学に入れず無念に思っている夫 Jude を次のようにいって慰める。

“It is an ignorant place, except as to the townspeople, artisans, drunkards, and paupers.”

「クリストミンスターは無知な処ですわ。市民や職人や酔漢や困窮者にとっては別だけど…」

They see life as it is, of course; but few of the people in the colleges do. You prove

it in your own person. You are one of the very men Christminster was intended for when the colleges were [founded; man with a passion for learning, but no money, or opportunities, or friends. But you were elbowed off the pavement by the millionaires' sons.”

「勿論彼等は人生をありのままに見ていませんわ。処が大学の人達でそんな者は先づ居ないんでしょ。これはあなたの一身上から証明出来ますわ。大学が出来た当時はあなた方のような人を入れなかったのですわ。あなたこそその一人で学問に熱心でお金も機会もない人をね。なんといったって、あなたはお金持の息子達のために道路から肘で突き飛ばされたんですもの。」

Jude, Sue が共に激しい憤りを感じて話し合った Christminster の実態はそのようなものだったのである。二人は膚に感じてその本質に触れたのだった。

つまり一石工である Jude が無理して押し入るにも余りに狭い富有階級の子弟のみに開放された大学の門戸であったのだ。この特権階級の関係者のみに開かれた大学の修了者だけが知識階級・上流階級へのエスカレーターに乗れた当時の社会機構のしくみ・制度に放たれた痛烈な息詰るような批判・叫びとなる。かくして Jude は Christminster の町を物思いに耽りながら悲しそうに、それでも屹とした態度で歩く。

From the roof of the great library, into which he hardly ever had time to enter, his gaze travelled on to the varied spires, halls, gables, streets, chapels, gardens, quadrangles, which composed the ensemble of this unrivalled panorama. He saw that his destiny lay not with these, but among the manual toilers in the shabby purlieu which he himself occupied unrecognized as part of the city at all by its visitors and panegyrists, yet without whose denizens the hard

readers could not read nor the high thinkers live.

「今まで入る機会のなかった、大きい図書館の屋根から、彼の視線はさまざまな塔や講堂や破風・街路・教会・庭園・方庭へと移って行ったが、これらのものが集ってまたとなりこのパノラマの全体をなしていた。自分の運命はこんな処にあるのではない。自分自身の住んだみじめな貧民窟の、肉体労働者の間にあるのだと知った。それはこの町にあこがれてくる者には町の一部とは認められないがこういう住民がなければ、勤勉な読書家も本が読めず、立派な思想家も生きていられないのだ。」

⑧ 社会の上部構造を支え、これに繁栄と自由とをほしいままに与えるものこそその底辺にある労働者市民であり、この勤労階級がなくては社会の構成も覚束ないし、高邁な思想家も育たないとして、初歩的だが階級観念を自覚した Jude をここに登場させる。

Hardy は資本家と労働者が鋭く対立した19世紀後半に既に社会主義者 Robert Owen に興味をもち、Rousseau, Tolstoi の人道主義の崇拝者でもあってその影響を強く受けて急進的な側、労働者・農民に味方したことが Jude のこの言葉となったと見てよいであろう。

大学の権威主義それが富有階級の独占物であることを象徴的に示すと思われる学長の手紙が待ちに待った Jude の手許にやっと届く。

“Sir,—I have read your letter with interest; and judging from your description of yourself as a working-man, I venture to think that you will have a much better chance of success in life by remaining in your own sphere and sticking to your trade than by adopting any other course. That, therefore, is what I, advise you to do.

Yours faithfully,—

「拝啓貴兄の御手紙慎重に拝見しました。

自ら職人との御説明より判断致せば御自身の境界に止ってその職を守られることは他の方針を採られるよりも成功の機会多かろうと思います。敬具」

⑨ この手紙こそかねて学長宛に Jude の学問への希求、大学への憧れ、入学の方法、将来の指針を仰ぎたい旨精しい手紙を出して一日千秋の思いで待ち焦れていたその返事だった。Jude はこの恐ろしく分別ぶった高慢な冷たい態度の侮辱的な助言と身分制を肯定し、それを基盤として虐げられた下層階級の努力の跡を少しも評価しない非情な態度に憤激する。これがとりも直さず世人のとりわけ青少年の憧憬と尊厳の美名のヴェールを被った特権階級の砦、大学の本質であったのだと。Jude のような独学者はそこでは嫌われる。俺達の知識は間違いが多い、発音が正しくないと嘲笑するが、「指導を受ける必要がある。君は気の毒に。」とってくれるもいいだろうと人一倍学問の情熱を傾けて努力し、既存の学者仲間に入りたいと希求し、貧困・不遇な人達に愛情をかけて貰いたいと学長・教授達に勢い激しい悲痛な願いを托するこの言葉は彼等に向けた抗議・批判となって拡大される。

大学の記念日に college の玄関で多くの教授達の入ってゆくのを目撃しながら不治の病に冒され、余命いくばくもない疲れ果てた憐れな Jude は雨の激しく降りしきる中を群る聴集に向って大胆に演説口調で切々と訴える。これこそ劇的・映画的手法で病魔に冒され再帰不能の失意の男 Jude とこれを憐れむかのように降る激しい雨とのコントラスト。周囲の状況と混然と融合し当面の hard case を忌憚なく提起するに相応しい。とりわけ社会の眼が個人の堅実味よりも偶然の結果に拠るものであって自分の能力が進路に適するかどうかを考えてもその努力は少しも評価されないで、偶然の結果のみを重視し、評価しようとするのは間違いだと述べてから Jude は一層熱っぽい口調で辺りのざわめきに声が掻き消されないよう声を張り上げていった。

“However, it was my poverty and my will that consented to be beaten. It takes two or three generations to do what I tried to do in one; and my impulses—affections—vices perhaps they should be called—were two strong not to hamper a man without advantages, who should be as coldblooded as a fish and as selfish as a pig to have a really good chance of being one of his country’s worthies.

「しかしながらみすみす打ち倒されたのは自分の本位はでなく貧乏のためでした。自分が一代でなしとげようとしたことをなしとげるには二代三代を要するわけです。若しその男が自分の国の偉い人達に仲間入りするような本当に好い機会を捉えようとするには、魚の如く冷血に、豚の如く利己的に振舞わなければならないのです。」

これは期せずして群集の大きな喝采を博した。けだものじみた労働と果てしない貧困の中で深い苦悩を背負って、日暮れて道遠い薄命の Jude の運命を決定的に支配した貧乏という事実に挑みこれに向けた憎悪に変貌した批判の絶叫は群集は勿論読者もこれに共鳴して憐愍・同情の感情を激しくゆさぶられる。

4

“Tess of the D’Urvilles”の Tess の悲劇は Jude の場合と同じく貧困であったがこれが災いして家庭の無知・因襲道徳・迷信的家庭の伝説等で命取りとなったが、いづれも Jude は社会機構の中の組織を個定的な個人の対立者としてしか捉えず、人間の生活と意識をその様な組織の中で孤立した個人という枠の中でだけ見るといった欠点はあるが、これを同じ時代に生きたフランスの Emile Zola (1840~1902) とその代表作の荒筋を通して比較対照してみることは興味あることであろう。Zola は Balzac の写実主義に実証主義的、科学的な分析を加えて、自然主義文学を創造し、ルーゴン・マッカール叢書 (1868~1893) の中で第二帝政下のフランスの

あらゆる社会面の真実を as it is に暴露し描き出した作家であった。例えば居酒屋・ナナ・獣人・ごった煮・壊滅などと共にその代表作と見做されるジェルミナルを瞥見すると、その荒筋は次のようになる。19世紀後半のフランス第二帝政末期、産業恐慌を前に深刻な不況にあえぐ北フランスのモンヌー炭鉱に機械工の一青年エチエンヌ・ランチュが失業してやってくる。冬の寒さと空腹を抱えて彼は経験したことの無い抗内運搬夫としてボルー抗に入抗する。予想も出来なかった地底での苦しい作業にその日限りでやめようかと思うが、従来からの資本家に向けての怒りがこみあげて、ここで苦しみ斗うことを強く決意する。その点で、Hardy の場合は “The Return of the Native” の Clym Yeobright や Jude Fawley や短篇の “The Tragedy of Two Ambitions” の Joshua, Cornelius 兄弟, “What the shepherd Saw” の羊飼いの少年 Bill Mills の生涯等のように Victoria 朝時代のイギリスのあらゆる社会面の真実を容赦なく非妥協的に彼等を通して描き出し、問題提起を試みているが、やはり前にも述べたように諸種の事件の社会的本質を掘り下げるといよりは、自分の道義的感覚に訴えてくるものをその限りに於て as it is に形象化するといったものがすべてであった。つまり、これらの主人公たちの被虐の内実が当時のイギリス近代の支配関係に色濃かった半ば封建的な側面と実態でとらえられていた傾向が強く、進歩と変革、退歩と変質とが未分化のまま複雑に入り組んでいて、人間の歴史にかかわるさまざまに異質なファクターがときに心情を通して奇矯に癒着した世界であることが多かった。これにひきかえ、エチエンヌは非人間的な苛酷な労働と果しない貧困の泥沼の中で、あきらめ切って自棄的に生きている抗夫とその家族にやり切れない気持を抱きながらも、打ち続く会社側の過酷な仕打に大きな憎しみを抱き、勤労者が主人公となる新しい社会を自分たちの手で作り出そうという情熱を新たに燃やすようになるの

である。

エチエンヌは独学に励み自分なりの理論を組み立てる。そして同じ職場のカトリーヌへの愛に悩みながら自分の考えを仲間たちの間にひろげる努力を続ける。新しい給与体系の撤回と炭車の単価引上げを要求する彼等は会社の妥協案をはねつけストライキは長期化する。会社の態度が硬化し、あちこちで入抗のうわさが流れると、エチエンヌは集会で演説を打ち、これがもとで、ストライキは続行、入抗の阻止が決議される。処が集会の次の日、粗野な抗夫シヤバルのスト破りに激昂した抗夫の集団はエチエンヌ等の制止を拒絶して、あちこちの炭鉱で自暴自棄の破壊をやってのける。支配人邸の包囲、投石、雑貨屋の主人の惨殺、商品の略奪。騒ぎは憲兵隊の出動でやっと治まる。やがては軍隊がモンヌー炭鉱に出向き弾圧がしかれる。追われる身となったエチエンヌは長い入院の後解雇されてパリで政治家となる夢を抱いて出発する。彼は資本家への復しゅうの希望をもって過酷な労働に耐える仲間たちの姿を見、試練をへて成長した自分を感じ、ジェルミナールの風景の中で労働者の力が古い社会を崩壊させる日の近いことを確信するのだった。この作品では民衆の政治的ほう起を描き、20世紀最大の問題となるはずの資本と労働との斗いを提出すると Zola は明言している。かくして自然主義の手法によって書かれたこの作品は炭鉱労働者の実態と、労資の対立関係を鋭く浮きぼりにして、斗う勤労者として今日なお生き生きとした感動を与えている。つまり事件の社会的本質を掘り下げ、社会機構の中の組織を固定的な個人の対立者として捉えるのではなく、人間の生活と意識をその組織の中で孤立した個人という枠の中でみるといったことなく、流動的・発展的に捉えてむしろ科学的に分析して捉えようとした処に新しさがあるのではあるまいか。それにしても Hardy のその創作の姿勢これはひとり彼だけの独壇場ではなく、同時代のロシ・ヤフランスの自然主義文学の影響を受けた作家 George Gissing, George

Moore もその創作の基本的態度・姿勢には類似のものを提示してくれる。

例えば George Gissing は
Art, nowadays, must be the mouthpiece of misery, for misery is the keynote of modern life.

「今日の芸術は貧困の代弁者であらねばならない。貧困こそは現代社会の基調であるから。」とその創作態度を批歴し、George Moore は

We do not always choose what you call unpleasant subjects, but we do try to the roots of things, and the basis of life being material and not spiritual, the analyst sooner or later finds himself invariably handling what this sentimental age calls coarse.

「我々は面白くない不愉快な物を選ぶつもりは何時もないのだが、とにかく事物の根源に達しようとするだけだ。人生の基礎となるべきものは物質であって精神ではない。早晚この分析者はこのセンチメンタルな時代が醜悪と呼ぶものを相も変らず処理することになる。」

と述べて^⑩同じくその創作の姿勢を示した。勿論 Hardy の言葉「詩人と小説家の任務は壮大のもとに悲哀を描き出し、悲哀のもとに偉大を表現することである。」そして

The conduct of the upper classes is screened by conventions, and the real character is not easy seen, it must be portrayed subjectively; whereas in the lower classes, conduct is a direct expression of the inner life; and thus character can be directly portrayed through the act.

「上層階級の行為は因襲に覆れているので容易に真の性格は把握し得ないものであり、把握することが出来たとしても、それは主観的・非具体的に描写されなければならない。ところが下層階級では、行為は直接に内的生活を表現している。そのため、性格は容易に行為によって直接描写することが出来るので

ある。」

⑩ はこれ等と共通して興味深いが、彼等はいづれも酔い心地や己惚の眼で人生の諸相を見ることに憤激し、事件の社会的本質を探り、追求する処まで発展出来なかったがとにかく物事の真相をつきとめ、皮を剥して肉、美の仮面を捨てて醜を意識的に暴露することに心掛けた。その結果人生の醜悪な事実へ驚き、悲哀を感じてとりわけ貧民生活の現実を鋭く描き出すことに努めた。この偶像破壊と社会改良を以て任ずる作家的態度——イギリス文学の中心的伝統となって存続した良心そのもの——が実は1880年代の終り殊に1890年代に他の方面に主流が外れてしまったといえないか。“Jude the Obscure”の受けた非難は激烈を極め、ジャーナリズムはうるさいまでに騒ぎ立て Swinburn “Poems and Ballads”が受けた攻撃、Byron の受けた攻撃にも劣らない激しさで、国内は勿論米国・濠州にまで及んで焚書事件は未だしも濠州から Jude の亡骸だと断り書きして一包の灰を封入した手紙まで舞込むその激しさに Hardy は萎縮まず屈せず自分を激励したが到頭これに懲りて以後小説を書くことを断念し専ら詩作に耽って、晩年を過したといわれる歴史的事実は暗示的・象徴的で何事か考えさせられる。当時流行した自然主義一派の若い作家達は自然主義の作風の主張が一向に世に顧られないので抗抵を受けるだけとの判断から、そういわれるが、実はその根抵には高度に発展しつつあった資本制生産過程が内部矛盾を露呈し、恐慌・退廃・虚無を導き出して民衆の生活を耐え難く荒廃させ、あまつさえ第一次世界大戦を始めとする戦争の恐怖が処々に連鎖的に無気味にささやかれ、のしかかってくる中で大きな歴史のうねりに無残にも押流され、嘗ては栄光と誇りに満ちた文学運動の良心であった主流も後退を余儀なくされて退嬰・権力追隨的・宗匠的・書齋人的と隋し、民主への展望指向に無縁^⑪となって「芸術のための芸術」を相変らず引き廻して「詩的昇華」を歌い文句に自己弁護にやっきとなり现实生活から

逃避して現実直視に立向うことをやめたのも事実ではあるまいか。Oscar Wilde, Beardsley, Yeats 等その代表的作家としてそれぞれすぐれた特質をもつが、反面巷間にさ迷って怪奇・技巧的・病的なもの、新しい珍奇な刺戟を求めてこれを謳歌し、庶民の知恵の凝縮した作品を生む作家の姿勢・態度をかなぐり捨てて、歪んだ社会の現実に向われないでこれから眼をそらす態度に走って、無難な道へと開店休業したといえよう。このようにして“Jude the Obscure”を結節点として奇怪な幻想・巧緻な表現を武器としてデカタンスに陥ったといっている言い過ぎだろうか。とにかく“Jude the Obscure”が分岐点となって以後新傾向の文学が次々と生れたことはたしかである。

[註]

- (1) 大沢衛編ハーデイ研究 420頁
- (2) 朱牟田夏雄訳トマス・ハーデイ (二つの野心の悲劇・みのらぬ恋) 訳者あとがき 179~180頁
- (3) 大沢衛編ハーデイ研究 15頁
- (4) Hardy: Jude the Obscure (the modern Library New York) p. 336
- (5) Ibid p. 338
- (6) Ibid p. 179
- (7) Ibid p. 179
- (8) Ibid p. 138
- (9) Ibid p. 398
- (10) Ibid p. 398
- (11) W. L. Cross: The English Novel, pp. 272—3でこういっているが Hardy もそうした理由によって創作しているのであろう。
- (12) 宗匠的でなかったことの参考として St. John Adcock は次のように述べている Hardy is, and will remain, a great and lonely figure in our literature. It is possible to trace the descent of almost every other writer, to name the artistic influences that went to his making, but Hardy is without literary ancestry; Dickens and Thackeray, Tennyson and Browning, had forerunners, and have left successors. We know what porridge and what honey-dew Keats had, but not what manna fed the austere soul of Hardy. [Like every master, he unwittingly founded a school, but none of his imitators could imitate him except superficially, and already the scholars are going home and the master will presently be alone in his place apart. His style is peculiarly his own; as

novelist and poet he has worked always within his own conception of the universe as consistently as he has worked within the

scope and bounds of his own kingdom of Wessex, and within that circle none durst walk but he. (Gods of modern Grub Street.)